兵庫県立こども病院時代の記録

２００３年４月から 2008 年３月までの５年間、神戸市須磨区の高倉台にあったこども病院で小児医療の最前線で働けたことは、大変貴重な時間を過ごすことができました。就任後、職員間のコミュニケーションのツールとして情報誌「げんきカエル」を創刊しました。

「げんきカエル」の名称の由来は、病院建設時に出てきた岩の名前です。写真のような置物として、病院の廊下に飾ってありました。

- 病院長就任にあたって 平成 15 年 4 月 7 日
- 情報交換は創造へのエネルギー　げんきカエル　創刊号
- こども病院がもつこれからの役割 平成 15 年 10 月 1 日げんきカエル
- やさしい医療を目指そう、ほほ笑みで げんきカエル 第3号 平成 16 年 1 月 1 日 新年のごあいさつ
- ほほ笑みの医療こそ、こどもの医療 げんきカエル 平成 17年 1 月 1 日 新年のごあいさつ
- ご家族とともに実践する小児医療 げんきカエル 平成 18年 1 月 1 日 新年のごあいさつ
- 小児医療は三位一体で げんきカエル 平成 19年 1 月 1 日 新年のごあいさつ

病院長就任にあたって　平成 15 年 4 月 7 日

社会が大きく変化する中で、こども病院のもつ役割、こども病院への期待の大きさを、これまで外部からみているだけでしたが、これからは自らが医療者の中心として実践していく立場となり、その責任の重大さに身の引き締まる思いがいたします。

三十三年の歴史により培われた兵庫県立こども病院の良き伝統を守ると共に、新しい社会的ニーズに対応できる医療活動を展開できればと考えています。

今日の医療に一番求められているのは、「安心」と「信頼」の医療です。

IT 化が進み、医学情報をだれもが容易く入手できるようになり、今や医療は医療者だけのものではなくなりました。医療情報の開示、提供を通じて、患者の利益を一緒に考え、実践していく姿勢が大切です。医療の IT 化といえば、ともすれば非常に冷たい響きがありますが、「安心」と「信頼」に最も大切なのは人間関係、人と人の情報のやりとりです。絶えず情報の行き交う、透明性のある職場こそ、「安心」と「信頼」の医療を展開できる第一歩です。患者様に満足していただける職場づくり、それには職員が満足して働ける職場でなければなりません。

乳幼児の死亡率の低下した今日、小児医療に対する社会のニーズは、大きく変化しています。

昨年 10 月から，本院は三次小児救急医療施設として機能しています。少子化社会にあっては，救急医療施設の充実は，安心した子育てに不可欠です。小児救急医療の中核施設として，兵庫県下の医療機関と連携を保ちながら，県民の期待にお応えしなければなりません。

疾病中心の小児医療から予防重視の医療へと、また、疾病をもつ小児では、大人の医療とは異なり、例え疾病を持っていても、その後の長い人生での社会生活を豊かなものにするための工夫が大切です。小児医療は退院すれば終結するものではなく、家庭に、地域に帰ってからのケアが不可欠であり，指導相談部を充実させてトータルケアを目指したいと考えています。

成育医療という概念が出てきたのも、このような時代背景があるからです。これからのこども病院には、単に小児期だけではなく、思春期を含めて、疾病をもつ子ども達が健やかに成人し、社会の一員して生き甲斐のある生活ができるように見守り、保障していく責務があると考えています。

「こどもは未来の宝」とよく言われますが、社会は、往々にして大人中心の考え方で進んでいます。戦争、貧困で一番被害を被るのはいつも子ども達です。経済成長下においても，子どもたちが自由に，伸び伸びと生活できる空間は奪われています。

こども病院は、「子ども達を守る砦」であるとの考えで、子ども達の視点で物事を判断する姿勢を職員全員が絶えず持ち続け，子どもたちに夢のある世界を創ろうではありませんか。

情報交換は創造へのエネルギー

病院長　中村　肇

IT技術の進歩により、情報は一瞬にして世界の隅々まで届く時代となりました。このたび、こども病院に新しく発刊される広報誌を通じて、われわれが持っている貴重な情報が、広く日本の、世界の子どもたちのしあわせに役立つものと大いなる期待と夢を抱いています。

今日の専門分化しすぎた医療に最も欠けているのが横のつながりです。この広報誌が「医療者と患者」「職種間での連携」、相互理解の手段になることを願っています。

あらゆる情報を社会に公開し、外部からでも理解しやすい、透明性の高い病院づくりこそが、医療への信頼を高め、医療のレベルアップにつながります。みんなの力で作成されるこの広報誌が新しい時代の小児医療への道しるべになると信じています。

管理局長　太田昭熙

県立こども病院は昭和45年に県政100周年記念事業として、国立小児病院に次いで全国で2番目の小児専門の総合病院として開設されました。以来33年間、県民の皆様のニーズに積極的に応え県下の小児医療の中枢となって活動して参りました。

今、まさに少子化の時代にあって、次代を担うこども達を一人でも多く健やかに誕生させ、育み、社会の一員として活躍できるようにすることが、時代の要請として求められており、当院の使命はますます重要です。

県立こども病院は、基本理念及び基本方針の下、より良質な医療を提供し、県民の皆様から信頼され安心してかかれる県立病院として、今後さらなる充実発展のため、この度、県民の皆様の多様な意見を聞き、医療ニーズを的確に把握し、病院運営に反映させるべく「広報誌」を発行いたしました。

県民の皆様方から寄せられます積極的なご意見を踏まえ、職員一人一人が共通の課題を認識し、共に病院の今後を見据えて改善のために、一歩一歩着実に取り組んで参りますので、ご支援いただきますよう宜しくお願いいたします。

看護部長　笹山美代子

創刊おめでとうございます。看護部は、以下の「看護部理念」にそって日夜努力しています。

1. 命を守り育てることに努力し、真の優しさと逞しさを備えた人間性を養い、患者家族の皆様の安心と満足が得られるよう看護提供に努めます。
2. 皆様の健康ニーズに応えることができる専門的で良質な母子看護を提供します。
3. 患者家族の皆様を中心としたチーム医療の調整役として、主体的に行動し、療養環境を整えます。

●「こども病院エンブレム」の由来

こども病院は県政100年の記念事業の一環として、昭和45年にわが国で2番目のこども病院として開設されました。また平成8年には周産期医療センターが併設され、出生前から母と児の一環した管理が可能となりました。このエンブレムは昭和60年に職員からの公募で選ばれたものです。兵庫県旗を基調に国際化時代にふさわしく英語で病院名をふち取りし、子供を育車する父親、赤ちゃんをだっこする母親、はいはいする子供の幸せな家庭を表現したものです。

●「げんきカエル」の由来

本誌創刊にあたり職員よりニックネームを募集した結果、『げんきカエル」が選ばれました。放射線科の待合いの角に座って周りを見渡している大きな石のカエルがニックネームの由来です。周産期医療センター建設中に出てきた御影石の塊でできています。みんな元気になって退院できるようにとの願いを込めて彫りだされました。小さな子供さん達が喜んで触れるので頭が少し黒ずんできました。こども病院のマスコットとしてこれからもみんな元気になって退院できるよう見守っています。

平成 15 年 10 月 1 日 「げんきカエル」

こども病院がもつこれからの役割

本院は、昭和 45 年に県政 100 周年記念事業として、国立小児病院に次いで全国二番目の小児専門の総合病院として開設され、小児のための総合的、高度専門医療の拠点として兵庫県の小児医療水準の向上への役割を担ってきました。二十世紀後半の医療の進歩は、科学技術の進歩による医療機器・医薬品の開発を取り入れた高度専門医療が中心であり、我が国の医療水準を世界一に押し上げました。二十一世紀に入り、社会は大きく激動しています。われわれはいま、小児医療への社会のニーズは何であるか？を、一緒に考え、行動しなければならないと思います。

われわれ子どもに携わる医療者は、単に疾病治療だけでなく、疾病治療を通じて、「すべての児童は、心身ともに健やかにうまれ、育てられ、その生活を保証される」という児童憲章の具現化に努めなければなりません。

1)「安心できる子育て」の実現

少産少子社会に入り、ひとりひとりの子どもへの親の期待は従前に比べ遥かに大きく、また核家族化の社会であるために親の育児不安は一層高まっています。指導相談部の機能をより一層充実させ、地域の医療資源・社会資源の活用を図りながら、たとえ疾病・障害をもつ子であっても「安心できる子育て」の実現を目指したいと思います。

本院では、昨年 10 月から小児救急医療室を開設し、小児三次救急を中心とした救急患者の受け入れ体制を整えました。兵庫県下各地からの三次救急患者の受け入れを行っていますが、救急患者用ベッドは 6 床のみで絶えず満床に近く、各地の小児医療機関と連携をとりながらその有効活用を図っています。

小児救急では、必ずしも生命に関わるような重症患者でなくでも、ご両親にとっては夜間の子どもの変化は心配なものです。本院では小児三次救急施設とは言え、毎日数件の電話による相談があります。多くは電話のみで解決しますが、なかには最重症患者が紛れ込み、緊急で来院頂いた患者さんもあります。専門の医師・看護師によるトリアージ機能・デストリビュート機能を備え、より充実した小児救急体制の実現を図り、救急救命だけでなく、「安心できる子育て」支援に貢献したいと考えています。

2)生活空間のアメニティ改善

「子どもだから、これでよい」ではなく、「子どもだから、こうしてやらねばならない」という発想をもつことです。大人は不満があれば、すぐに口に出しますが、子どもは決して口に出しません。ご意見箱「ハートメッセージ」では、親が我が子の代弁をして下さっています。しかし、子どもにずっと付き添っているのは医療者です。医療者は入院中の子どもたちのお父さんであり、お母さんです。絶えず子どもたちの代弁者であることを忘れずにいて下さい。医療者自身が、子どもの目線で声を出さないと子どもたちのアメニティは改善されません。

3)情報社会から取り残された医療

こども病院では、子どもさんだけが入院されていることから、入院中の出来事を親が知り得るのは、医療者だけからなのです。われわれも積極的に医療情報の開示に努めてはいますが、パソコン、携帯電話とこれだけ日常生活でITに馴れ親しんだ社会の中では、ご家族になかなか満足していただける情報をうまく提供できていないのが実情です。

カルテの記載は、私が医師になった 30 年前とほとんど変わっておらず、患者さんが読まれても先ず分からないと思います。今日のカルテシステムでは、誰がみても分かる記載をするのは困難です。折角ばく大な量の各種検査・治療の電子化された医療情報があるのに、統括的な処理システムがないために、手仕事でカルテに転載するという前近代的な処理が医療の現場ではなされているのです。従前に比し数十倍にも増大した情報の洪水の中で、昔ながらの手法というアンバランスが医療者へのストレスとなり、医療過誤の原因となっています。

医療分野における IT 化が、一般社会から大きく取り残されている理由としては、「患者情報の保護・守秘」という面があったからだと思います。しかし、患者情報を患者と共有する体制ができつつある医療機関では、IT 化の推進を図ることが医療の透明性を高め、医療不信への解消に結びつくと考えています。

IT 化が実現するまで、当院では人海戦術で患者・ご家族に納得していただける医療を目指していきたいと思っています。

げんきカエル 第 3 号　　平成 16 年 1 月 1 日

新年のごあいさつ
「やさしい医療を目指そう、ほほ笑みで」

王子動物園の亀井一成さんからの寄贈作品です。

小児医療のゴールは、疾病をもつ児のいない社会の実現ですが、現実には完治せずに退院せざるを得ない症例も多く、入院時よりも退院後の療養生活の方が患者・家族の方々にとってははるかに深刻な問題となっています。疾病を、障害を持ちながら満足できる社会生活を営むための支援体制づくりが大きな課題になっています。

「こどもの人権重視」を病院の基本理念に

昨年 10 月には、「こども病院の基本理念・基本方針」を新たに制定し、「母と子どもへの総合的、高度専門的な医療を通じて、親と地域社会と一体になって子どもたちの健やかな育成を目指します」という文言を加えました。患者・家族の方々に満足していただくために、技術的に専門性の高い医療の提供だけでなく、地域の医療・保健・福祉機関と連携したサービスを展開していきたいと思います。

ほほ笑みの医療を

質の高い医療の実現には、医療者の心構えが最も大切です。ローマ法王庁のピタウ大司教は、人間関係をうまく保つうえに大切なこととして、「捧げる」、「思い遣り」、「ほほ笑み」の 3 つを挙げられました。「思い遣り」という言葉は英語にはなく、日本語固有のものだそうです。Sympathy（同情、共感）という単語はありますが、少しニュアンスが違うようです。日本人のもつ「思い遣り」の精神があれば、世界中で戦争は起こらないと神父さんは話されました。

私はこの 3 つのうちで、絶えず逆境にある人たちに接しているわれわれ医療者が忘れてはならないのが「ほほ笑み」だと思います。TPO を間違うととんでもない誤解を相手に与えてしまいます。お互いに訓練し、ほほ笑みの達人になろうではありませんか。

◆ Smile your grief away.◆
笑って悲しみをぶっ飛ばせ

『情報収集・情報提供の工夫をしよう』

病院長　　中　村　　肇

今日、我が国の医療に対する不信は大きく、我々は猛省を促されています。医療不信の最大の理由は医療の密室性にあります。医療が個人のプライバシーに関わる問題を取り扱っていることを理由に公への情報提供を躊躇ってきたこと、またがんや重篤な後障害を残す予後不良な疾患については患者・家族への配慮として正しい情報提供を速やかに行わなかったことにあります。

兵庫県立こども病院では、親子が一緒に過ごせる時間を少しでも長くとれるよう配慮してはいますが、残念ながら病室の狭矮さから親子分離の看護体制をとらざるを得ません。夜間幼子をひとり病院に残して我が家に戻られる御両親にとっては、病状だけでなく、わが子が同室の子どもたちと仲良くできているか、泣いてはいないか、心配が尽きないと思います。

私たちは、御両親が病院におられない間のできことをできるだけ詳細にお伝えするようにしています。病気に関することだけでなく、生活に関することも。物言わぬ子どもたちですから、私たち医療者が代弁しないとそれこそ密室になってしまいます。

IT化が進み、患者と医療者の情報共有が可能となりました。私ども医療者は医療の詳細を正確に、かつ分かりやすくお伝えし、患者さまと情報を共有する工夫が大切です。医療者・患者間の円滑な情報共有には、医療者間での情報ネットワークが必須です。人と人のコミュニケーションです。

他の分野に比べてIT化で大きな遅れをとっている医療界です。医療が社会の信頼を回復するにはハードもソフトも一新し、いつでもどこからでもアクセスできる双方向の医療情報ネットワークを１日も早く病院内外に構築し、コミュニケーションの輪を広げることです。

ほほ笑みの医療こそ、こどもの医療

病院長　中　村　　肇

新年おめでとうございます。
昨年10月には周産期医療センターが開設10周年を迎えました。井戸知事をはじめ、当センターに入院しておられたお母様とお子様方400組近くの方々のご参加を頂き、記念式典・交流会を賑々しく開催することができました。

本年は、病院設立35周年に当たります。わが国の小児医療施設のリーダーとして高度専門医療を提供し、小児医療の発展に貢献してきました。近年、医療技術の進歩とともに乳児死亡率は著しく低下し、県民の医療への期待も大きく変化しています。われわれは時代のニーズに応えるべく、一昨年10月からは暫定的とはいえ兵庫県下の小児の三次救急センターとしての機能を担い、重篤患者様を中心に積極的に小児救急医療に取り組んでいます。さらに、昨年末からは、親の育児不安解消のために兵庫県が開始した小児救急電話相談事業＃8000にも本院の医療スタッフが全面的に協力しているところです。

新年を迎えるに当り、もう一度小児医療の原点に立ち戻り、より一層の努力をしたいと考えています。

まず、われわれは医療者であると同時に、子どもたちの親代わりです。ほほ笑みが、病と闘う子どもたちに安心と信頼、勇気を与えます。ほほ笑みの医療こそ、こども病院の医療です。

ついで、地域の医療機関と緊密な連携を図り、より幅の広い医療を展開することです。退院した子どもたちが、安心して地域で医療を受けられるように，院内だけでなく院外の方々とも協力して子どもたちを支えていくネットワークづくりを図りたいと考えています。また，われわれは小児専門医療機関としてもつ数々の情報を国の内外に向けて発信していかねばなりません。

こども病院にはいろんな課題が山積しています。ひとつひとつを皆様方の英知と情熱で解決し、素晴らしい年になることを念じています。

2005年1月

ご家族とともに実践する小児医療へ

院長　中　村　　肇

　新年おめでとうございます。新しい年への大きな希望に胸を膨らませ、春を迎えられたことと存じます。

少子化とも相まって、親の育児への不安感は増す一方です。増しても、病気をもつ親の不安は計り知れないものがあります。長期にわたる親子分離は、親子関係を希薄なものにします。とりわけ、人生の出発点での母子の分離が大きな問題となっています。母子の触れ合いを少しでも増やすことが、ともすれば希薄になりがちな現代の親子関係をより緊密なものにしてくれると確信し、本院周産期医療センターでも、昨年５月からようやく母子同室制を導入しています。

　本院の一般病棟においては、これまで面会時間を設定し、お子さんだけをお預かりする体制をとっていましたが、親子関係を重視するために、親子で一緒に病室で過ごせる時間をできるだけ増やすようにしました。お子様の状態やご家族の希望によっては、夜間帯も一緒に過ごしていただけるようにしています。本来なら、フリーの面会としたいところですが、すべてのご家族が子どもと一緒に夜間も過ごしていただくには、病室があまりにも狭すぎてご不便をおかけすることになるため実現していないのが実情です。

元気な乳幼児でも一日、一日変化しています。闘病中の子どもたちの毎日の変化は、病気の変化だけでなく、成長の変化も加わります。親自身が自分の目でわが子の成長の過程を確かめることが、その後の親子関係の形成に欠かせないものです。親の胸に抱かれた子どもの顔は、緊張感から開放され、本当に安心した顔つきになっています。

　私たち医療スタッフ、とりわけナースの役割は、親と一緒に過ごすことのできない空白の時間の病状だけでなく、子どもたちの生活振り、成長の記録をご両親に伝えるよう努めています。親が見る病室での子どもの様子には、医療者の目から見るのとは別の子どもの顔があります。親一人ひとりによって、子どもの見かた、接し方が違います。親の観察を小児医療を実践していく上での重要な情報として、子ども一人ひとりへの接し方について工夫をしていきたいものです。

　子どもたちにとって、素晴らしい年になりますように。

小児医療は三位一体で

病院長　　中村　肇

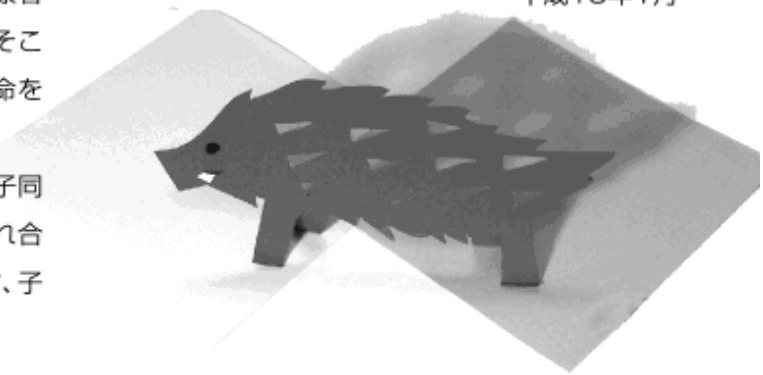
新年おめでとうございます。本年が皆様方にとって素晴しい年でありますよう心よりお祈り申し上げます。

昨年9月には、秋篠宮文仁親王、同妃紀子さまの第三子悠仁（ひさひと）親王殿下がご誕生になられ、その健やかなご成長を祈念し、各地で慶事がもたれました。ご懐妊にあやかり、若い人たちが結婚し、婚姻数も、出生数も増加する見通しとなったと報じられ、少子化克服への微かな光が見えてきたことを大変うれしく思っていました。その喜びも束の間、子どもの自殺、いじめという大変痛ましい事件が多発し、大きな社会問題となっています。また、乳幼児虐待も後を絶たず、その数は年々増加の一途を辿っており、傷を負った子どもたちが救急室にも運び込まれてきます。核家族化が一般化した現代社会では、折角子宝に恵まれても、地域の、社会の支援がなければ、親子は孤立し、育児不安を生み、不幸な結果を生み出します。

私どもは、「安心」と「信頼」の小児医療の提供を目指しています。高度先進医療は、高価な医療機器と医療者だけの力で決して達成できるものではありません。そこに家族の力が結集し、三位一体ではじめて子どもの命を守り、健やかな成育を目指すことが可能となります。

本院では、平成17年4月よりようやく新生児の母子同室制を取り入れ始めました。出生直後からの母子の触れ合い、親子の触れ合いは、親子の絆を強め、育児への自信、子どもの安心感を高めてくれます。また、成長したときに自分の幼少時の出来事を母親が繰り返し、繰り返し語りかけることで、子どものこころには親への感謝の気持ち、やさしさが培われます。

入院してくる子どもたちは、その不安からいつも以上に母親を頼りにしています。苦しみ、痛みとたたかう子どもたちのベッドの傍らで、そっとその小さな手を握りしめ、やさしくわが子の眼を見つめる母親の存在に、子どもたちは安心し、病と闘うエネルギーを生み出しています。母親には医療者にはないわが子への念力が備わっています。

本年の目標として、看護師、医師をはじめとする医療者は、ご家族と一体となって、互いに「語り合いの医療」を展開することにより、子どもたちが安心して医療を受け、一日も早く元気に家庭に戻れるよう職員一同努力する所存です。

平成19年1月